つまりは何事も学習が肝心ということです

声帯という物があると「声」を出すことができます。そんなことは周知です。ついでに言えば他の霊長類と比べ脳みその容量が多いので「声」を「言葉」にすることができます。これにより人間同士はより容易にコミュニケーションをとることができ、人間社会は進歩してきました。

しかし、その「声」を出せない人たちもいます。その要因は様々です。「声帯に何らかの異常がある」だったり、「耳が聞こえない」だったり…。ではそのような人々はコミュニケーションをとることができないのでしょうか。

いいえ、そんなことはありません。コミュニケーションという物は何も音を介したものではないのです。視覚から触覚から、人間にはまた「五感」というものもありますから。

しかし、これはそう簡単な問題ではありません。五体満足で生まれ、目も耳も脳も声帯もなんの異常なく過ごしてきた私が論述できるようなものであったら、そもそもこんな議論にはならず理解の齟齬などは生まれないでしょう。

声にできても意味が伝わらない、他者の言葉が理解できない。コミュニケーションはよくキャッチボールに比喩されますがそこにおいて、キャッチはできても投げ返せない人、そもそもミットを持っていない人、はたまたバットで遠くに打ち返してしまう人、その苦悩を私たちが百パーセント理解することなんてできないでしょう。どうして？キャッチボールなのに、ルールがわからないの？と大真面目に考えてしまうかもしれません。

ではこのような齟齬をなくすにはどうしたらよいのでしょうか。私はそれに対する答えを（必ずしも正解ではないでしょうが）「知識」、この一択だと思っています。

またキャッチボールに例えます。わたしは当然キャッチボールという物を知っていますが、もしかしたら相手はボールを生まれてはじめてみた人なのかもしれません。私が思い込んでいる

だけでそんな常識は私の中だけかもしれないという可能性を考えなくてはいけません。相手に甘えているだけではただの怠慢や強要に過ぎないでしょう。私は私の無知ゆえに理解しようとする機会自体を手放しているのです。

現実的な話に戻ります。「障害」という物をどこまで理解されていますか？私は恥ずかしながら大学で学ぶまで知らなかったことばかりです。毎日毎日自分の無知を感じています。このようなコラムを書くのも本当はおこがましいことです。しかし、一つ授業を受けるたび知識が増える感覚は、私にとって別の「声」が聞こえるような気がするのです。決して自分語りがしたいわけではありません。なんだか散漫な文になってきましたね。

感覚的な話ですが、シャンポリオンの気持ちがわかるといったら横柄でしょうか。今までわからなかったことがわかるようになるという意味合いです。

これは知識によるもの。相手を知らなければ理解などできない。しかし、現代社会において悲しいことに義務教育ではこのような分野を詳しくは学ばないのです。共同参画社会、グローバル化、一体化という言葉が盛んになっているにもかかわらずここに至ってはなんだか弱火のように思います。

声という物を辞書で引くと、発声器を伴う音とありますが、広義には「伝えたい意思」というのも含まれると思います。「聞こえない声」「無視される声」なんて悲しい比喩がありますから。では、そんな声を拾うに必要なものは何でしょう。

全文を通して言いますが、私は、耳ではなく知識だと思うのです。